

婦人と子ども

第一巻第拾貳號

(明治三十四年十二月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

黒子太郎 (ついで)

やまとの翁

強盗どもわ、自分の留主の處え、黒子太郎が來て
 遠慮なしに寝てるのを見たのですから、大變に怒つ
 て『誰だく何者だ』といつて騒ぎだしました。
 そこで老婆さんわ、『あー此子わね 道に迷つたん

だといって 前程さき來きましたから 私わたくししや可愛相かまだと思おもって寝ねかしてやったのさ。何なんだか玉たま様の手紙てがみを。お后きさきの所ところえ持もって行くのだ相そな』と、話はなしました。ずると強盜どろばいどもわ、そつと手紙てがみを取とり出だして讀よんで見て、始はじめて此この子こわ手紙てがみを持もって行いくとすぐ殺ころされるのだとゆーことが分わかりましたから さすがの強盜どろばいども、何なんだか可愛相かまに思おもって來きまして、

甲盜かみ君きみ、どーです、此この子こわ自分じぶんが殺ころされる使つかに行いくんだね』

乙盜おとそーさ

可愛相かまなもんだね。

丙盜どーかして助けてやらーじやないか』
 と口々に言ー合つて居ますと、其中の大將が「よし、
 よし、已が一つ工夫してやるー」とゆーので、やが
 て其手紙をすだくひきさいて仕舞つて、そ
 れから自分で筆を取つて他の手紙を書きました。
 それにわこーゆーのが書いてある。
 この若者が行つたら皇女の聾にしなさい』
 そこでそつと元の様に黒子太郎の懐中に入れて
 置いて、楮夜が明けてから道を教えて出立させ
 てやりました。

それからだんく道を急いで黒子太郎わとーく
 お後の所え着いて 彼の手紙を渡しますと、お后わ
 それを眞實に 玉様の手紙だと思ひましたから、す
 ぐに立派なお酒宴を始めて、黒子太郎をお姫様の
 お聲さんにして仕舞いました。

後で玉様がお歸りになつて、大變びくくりしまし
 て、お后に「どーしてこんな間違をしたのか、朕わ
 彼を殺してしまえと書いておつた筈だが」といつて
 それわく、非常な不機嫌ですから、お后わ、「それで
 も 陛下のお手紙わこゝに在りますから ご覽な

さうい』といつて 王様に見せました。

王様わ 夫をご覽になると なるほどご自分でお
書きになつたのと違う。そこで何でも黒子太郎が
どこかで取り代えたのだと思つて、大變に怒つて、
黒子太郎をよび出して、お尋になる。すると黒子太
郎も一向知らないのだから

「私わ何んにも知らないんです。けれども もし手
紙が代つて居ると仰しやるなら 夫わ私の泊つた
森の中で強盗どもが取り代えたのでしよー」
こーい ったもんですから 王様わ又大變に怒り出

して

『よし／＼夫なら夫でよし 然し黒子太郎よ、朕の所の聳さんになるにわ 鬼の頭に生えてる金の毛を三本取って来て朕に渡さんければならぬが、夫が出来るかどーじゃ？ 出来なければすぐ逐い出してしまうのじゃ』

よもや 太郎に出来そーにもないと思われたからこーいって 王様わ 黒子太郎を逐いだす積りなのです。所が黒子太郎わ わけもなく 『三本の金の毛、かしこまりました、取ってきましょー』 といつて、

お違乞ちがねがをして どこえともなく出てしまいました。

さても黒子太郎くろころうたろうわ だんく道みちを急いそいで行きまし

た所ところが、一つの大きな町まちえ着つきました。すると町まちの

門番もんばんが居あつて『これくお前まえの名なわ』と問といますか

ら『黒子太郎くろころうたろう』と答こたえる。門番もんばんわ又また『お前まえわ何なにを知し

ってるのか』といいますから『なんでも知しってる』

と答こたえました。しまずと門番もんばんのいいますにわ

『それじゃこの町まちにお酒さけの流ながれてくる河かわがあつた

のだがどどししたのか 近頃ちかごろわ 夫それが留とまってしまつ

て水みづ一滴ひとしずくも流ながれてこない どどかその譯わけをいいつてく

れませんか』といへますから、太郎わ「そんなこと
 わなんでもないけれど私しの歸りにいってや
 ろー』それからこゝを通つて行きました所が今
 度わまた大きな町え來ました。その門番が又
 前の様に尋ねまして、太郎がなんでも知つてるとゆ
 ーのを聞いて、
 『それじゃ此町に金の林檎のなる木があつたのが
 どーしたのか近頃わ一つもならない様になつて、
 丸で葉も落ちて仕舞うのわ何故でしよーかどー
 か其譯を聞かせて下さい』それで太郎わ「僕わ、チ

ヤンと知ってる けれども 今わ急ぐのだから歸りに
 いったてやる』

そこでだんく行きました所が 今度わ大きな川
 え出て來ました。そこに一人の渡守が居って また
 太郎に 何か知ってるかと聞きますから 前の様に
 なんでも知っていると答えました所が 渡守のゆゑに
 わ、

『私わ、こゝでも一何十年とゆゑ 長い間こゝやつ
 て あちらこちらと船を漕いでるのだが も一ど一
 かして 船漕ぎを已めて欲しいと思つても 一ど一し

ても宥ゆるされないうで　いつまでもくく漕こいでねばなら

ないどゆーのわ　なぜでしよーか　いって下ください

黒子くろこ太郎たろうわ　『その譯わけか　いって上あげよー　けれども

私わたしの歸かえりまでお待ちなさい

この河がはを渡わたって行ゆきますとすぐ向むかいに鬼おにの棲すま家の

入いり口くちが見みえます。やれくどくく來きたわと思おもって

黒子くろこ太郎たろうわ　少せうしも恐おそれないうで　ずんくと這は入い

って行ゆきますと　何なにんだかそこらが　薄うす暗くろくって

變かに妙みまな臭にお氣きがします。構かまわないうで　だんくく奥おくえ

行ゆきました所ところが　丁度ちやうどこの時ときわ　鬼おにがお留とど主まで　鬼おに

のお老婆さんが 獨り大きなく座布團に座つて
すっぱく煙草を飲んで居ます。

老婆さんわ 太郎の這入つて來たのを見て じろ
じろと咏めながら 「おや 變だよ お前わ人間じや
ないか 一体何しに來たの」

太郎「私わ この大將の頭に生えてる金の髪の毛を
三本だけ貰いに來たんです でなければ私わ、王様
のお姫様を貰うことが出來ないんですから」

老婆「おやく何とゆー大膽なことだろー！ 今にも
大將が歸つて來て お前を見つけたら それこそお



山城

前まえ命いのちがないよ……………併しや

十二

しまーじつとして静しづにし

て居まつてご覽かん萬まん一いつする

と私わたしが助たすけてやることが

出來うるかも知しれない。

鬼おにの老お婆ばさんがこー

いーながらやがて太お郎らう

を小ちさなく一いっ疋びつの蟻あに

して仕し舞まいましてそれ

から老お婆ばさんの衣き服ふくのす

そこに這入つて 黙つてじつとしておいでと いろいろ
 けました。

そこで蟻になつた太郎わ 急に小さくなつて ぞ
 ろくくとすその方に這いこみながら

蟻ありがとーく、 けれど お老婆さん 私しに三
 の事を教えて頂戴。 一っわ、 あのお酒の流れる河が
 なぜ干あがつて仕舞つたんですか、 も一っは、 あの
 金の林檎がなぜならなくなつてしまつたんですか、
 それからも一っ、 あの渡守が 毎日年がら年中あ
 ーやつて漕いで居つて どーしても宥されないのわ

何故でしよー。これだけ教えて下さいな』

すると老婆さんわ『うん どれもこれも みなむ
つかしいな しかし今に大將がもどって 何かゆー
から 黙って夫を聞いて居れば分るか知れないよ』

